

山元町震災復興 土曜日の会だより

いちご新聞

【第1号】2012年6月1日

発行：山元町震災復興土曜日の会
住所：宮城県山元町山元
山元町字山元 普門寺内
発行責任者：砂金 敏
(土曜日の会会長)
電話：090-1938-5170

～土曜日の会とは？～
山元町の復興を
考える住民の会です

土曜日の会 活動報告

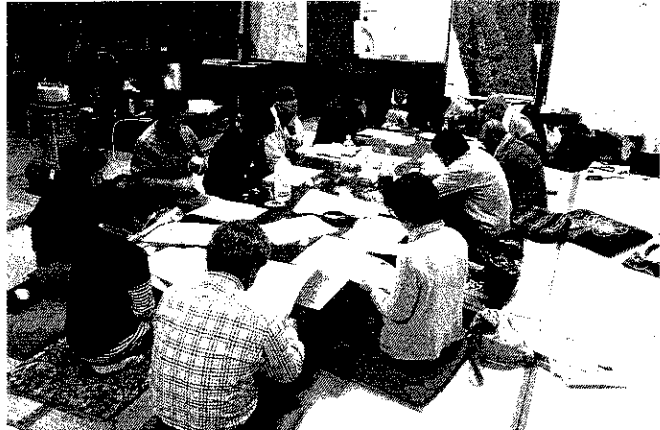
今こそ住民同士の繋がりを

広く住民の意見を吸い上げたい

去る4月28日(土)、普門寺内において第17回、山元町震災復興・土曜日の会が開かれた。参加者は砂金会長をはじめとする土曜日の会のメンバー、普門寺を拠点とする「テラセン」のメンバー、山元町震災復興アドバイザーとして招かれた東北工業大学建築科の先生方、「仙台荒浜地区の再生を願う会」の方々、そして地元議員さん、山元町の住民の方々など合わせて約20名。午後6時から2時間

にわたり、山元町の震災復興について活発な意見交換が行われた。
東北工業大学の方々
の出席は、土曜日の会の砂金氏、田代氏の震災復興支援要請を受けてのものだ。先に行われた4月19日の復興支援打ち合わせ会においては、復興まちづくりに向けた東北工大との連携について話し合われた。現在山元町がかかえる問題は「震災により住民がバラバラになったこと、コミュニ

ニティーが崩れ自治会も機能していないこと」「そのような中で土曜日の会を立ち上げたものの、ハード的にもソフト的にも地域が崩壊した状態で、何をどうしたらよいかわからない状況であること」「町の復興計画が進む中、住民側からの意見を十分に伝えられないことで、計画に対する閉塞感が見られること」…などがあげられた。このような問題をふまえ、土曜日の会としては復興まちづくりに向けた住民組織作りと意思形成についての支援、連携、そして大学の幅広い専門知識と独自の調査を生かしたアドバイスを要請した、という経緯がある。



第20回土曜日の会の模様(普門寺にて)

東北工大の「論点マップ」もとに今後の課題を整理
東北工大大客員研究員の菊池氏より、山元町の「現在の状況」「町としての動き」「現状の課題」を踏まえて、地域の復興に向けた「論点マップ」が示された。支援要請のあった「住民の組織作り」「住民意見の集約と合意形成」「地区居住条件の調査」「地区の復興計画立案」「住民の自主復興活動」の5項目を基に、大学として出来る支援を検討していく。山元町の住民はどのような暮らしを求めているのかということをはっきりさせ、山元町全体での生活環境を考慮した計画を具体化させることなど、土曜日の会の担う役割についても言及があった。

「荒浜再生を願う会」 (仙台)との情報交換

山元町住民側からは、震災から1年以上が経過し、

い住民と移転を選ぶ住民とで方向性が分かれている、という現状が報告された。
今後の生活の不安や悩みを
なんでも話せる会にしたい

山元町では、家が流されてしまった人は移転や生活再建についての不安や悩みがあり、一部元の住まいに戻ってきている人達は居住環境が悪化しているという悩みを抱えている。このような住民一人ひとりの生活の悩み、問題、要望などの情報をきめ細かく集め、それを再び住民にフィードバックしたり、町側へ伝えていくことなど、土曜日の会のはたす役割は大きい。そのためにも多くの人が土曜日の会に集い、ざつぐばらんに話し合ったり、情報を共有することが必要であるというまとめで本日の会は閉会となった。

人口流出に歯止めがきかず震災前の1万7千から、町の発表では1万4千に減少、実質町内に居住している住民は1万を割る勢いであることに危機感を抱いているとの声が聞かれた。また、土曜日の会は花釜、牛橋、笠野などの住民が中心だが、被災地域は新浜、中浜、磯など浜通りの広域にわたって、住民同士のまとまりにも欠け連携や組織作りが難しいという問題点も出された。仙台荒浜側からは、地理的にも地区のまとまりも良く、会を立ち上げたものの、現在では移転問題もあり、住み続けた

山元町震災復興の混乱から5年後になる。「JR陸移転計画から始まった。JR山下駅の早期復旧開通は全ての町民の願望だ。山元町は仙台の通勤、通学、生活圏だからJRが復旧しない限り住民の生活復興はできない。JRの復旧が遅れるほど住民は困窮し、自衛のために仙台方面へ流出する。山下駅は現地復旧が最も早期開通になることは仙石線等、他の路線の復旧状況を見れば明らかだ。山下駅を内陸移転すれば開通は最低これか

JR山下駅の内陸移転は 復興を遅らせ、 地域を衰退させる

山元町震災復興・土曜日の会
田代侃 (花釜)



山元町震災復興の混乱から5年後になる。「JR陸移転計画から始まった。JR山下駅の早期復旧開通は全ての町民の願望だ。山元町は仙台の通勤、通学、生活圏だからJRが復旧しない限り住民の生活復興はできない。JRの復旧が遅れるほど住民は困窮し、自衛のために仙台方面へ流出する。山下駅は現地復旧が最も早期開通になることは仙石線等、他の路線の復旧状況を見れば明らかだ。山下駅を内陸移転すれば開通は最低これか

バツグン・トウザ・花釜

住民の声インタビュー①
渡邊貞子さん(現・ナガワ仮設)



震災前と変わらぬ、見事な藤棚

山下駅前橋元商店の西側、駅前道路からちよつと入った藤棚のある家が渡邊貞子さんのお宅だ。毎年桜が終った頃、紫のシャンデリアのようなみなぎと藤の花は、表通りからもよく見え、近所の方や保育所の子ども達も花見に来るほどだった。震災後も塩水に負けず、みごとに花を咲かせていた。震災前同居していた娘さん夫婦は戻りたくないというので、貞子さん達老夫婦が住める小さな家を建てるつもりだ。娘さん夫婦もこの場所に想いはあるが、夜になれば暗く、隣組だった家も歯が抜けたようにまばらで店もなく心細い。親のことは心配だが戻る気にはなれずにいる。将来に不安をかかえる貞子さんの表情は暗かった。

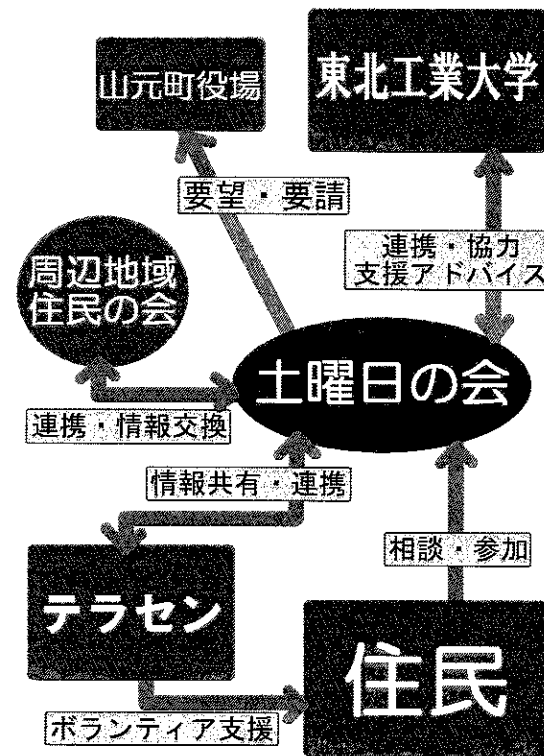
お知らせ

いちご新聞創刊

復興を考える「住民の会」

震災から9カ月たったクリスマスも近いある日、普門寺に4人の山元町住民が集まっていた。普門寺住職の坂野和尚、テラセン代表の藤本さん、そのテラセンに自宅のガレキ撤去の支援を受けていた砂金さんと小野さんだった。話題は「山元町はどうなっていくのだろう」「このままでいいのか」：4人は、秋頃仙台荒浜の住民の会について知り、山元町にも住民の会の必要性を感じていた。「山元町にも住民の会を作ろう！」これが土曜日の会のスタートとなった。

それから毎週土曜日の夜に集まり、現在まで20回を数える会を持つてきた。



まず取りかかった津波被災地域における住民の居住意向調査は今年5月にほぼまとまった。もとの住まいに戻ってきたいと考える住民がどれくらいいるのか、生活環境やコミュニティをどうやって再生していくのかなど、現状把握には欠かせない調査だ。土曜日の会の会長砂金政宏さんは、これから土曜日の会を身近な情報交換など、住民が気軽に集まり、山元町のこれからについて前向きな話し合いのできる会にしていきたいと語る。また、この「いちご新聞」も「りんごラジオ」に続くような住民の声を反映した新聞にしていきたいと期待をよせている。

おてら災害ボランティアセンター テラセン活動報告 その①

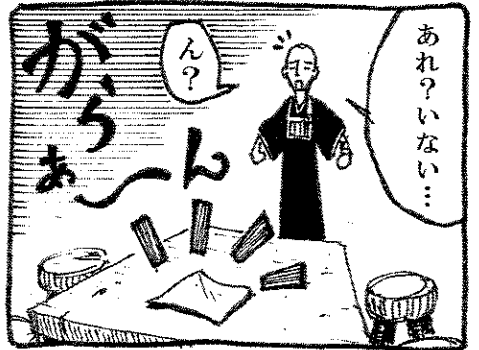
連休明けのどかな昼下の時間になっても、一向に昨日の嵐が嘘のような穏やかな風に吹かれ、普門寺の文俊和尚はいつものようにテラセン事務所のドアを開けた。さて、昼飯でも食べようかと腰を下ろした文俊和尚。しかし昼休憩

俊和尚の目に、一枚の書き置きが飛び込んで来た。「つば市へ向かいます。」

「テラセン」向、竜巻被災地茨城県つくば市へ向け出発。5月7日(月)、テラセン代表藤本さんはメンバーらと共に資材を積み込み、昼前に2トンプと軽トラックで、竜巻被害の出た茨城

県つくば市へと出発。途中、車両トラブルに見舞われた為、夕方になって現地に着。既に現地で活動を開始していた他のボランティア団体と合流し、貴重品の捜索や被害状況の確認などの活動に入った。

翌日からは文俊和尚も現地合流し、被害の大きかった北条地区へ入り、つぶれた倉庫の解体、がれきや瓦の撤去、荷物の運び出し、屋根のシート貼り等、他団体と連携しながら現場の復旧作業に当たった。今後は山元町での活動と共に、現地つくば市との連絡を取りながら復旧支援活動を継続して行くとのことである。



普門寺本堂とテラセン事務所

現地再建を目指す ユニークな取り組み

仙台荒浜地区は住宅地の大半が災害危険区域に指定され、防災集団移転促進事業の対象となった。宮城県では仙台市や山元町などで、はじめに自治体が危険区域を指定した上で、移転希望世帯の土地を移転促進区域に設定する「災害危険区域先行型」の手法が進められている。

仙台荒浜地区は、漁業や農業によって培われた豊かな自然環境に恵まれ、仙台市で唯一の海水浴場があるなど地域資源に富んでいる。

長い年月をかけて、総合的な住まいの環境を育んできた地域である。そのよな地元での暮らしを、代えがたいものと考えている住民が中心となり昨年12月に「荒浜再生を願う会」を結成。東北工業大学建築学科新井研究室、NPO法人まの縁側育くみ隊などがその支援に当たっている。現在は、その土地に住んで止めるという理解のもと、日本国内に加え海外からも支援の声が寄せられて

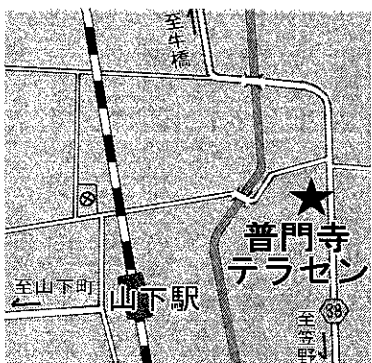
これまでに、地区での活動を発信する「荒浜新聞」の発行、自らが目指す場所での再建への想いを表す「希望の黄色いハンカチ作戦」などを実施。また、5月には地元住民、学識経験者、NPOなどが参加して、活動の今後の方向性を話し合う「荒浜フォーラム」を開催した。今後は、さらに支援者を拡大しながら仙台市の対話を続け、住民側から安心して暮らせる荒浜の将来像を提案していくことになっている。

(東北工業大学 建築学科 講師・新井信幸)

編集後記

「土曜日の会...って何?」「どんなこと...してるの?」つい先日まで土曜日の会の存在すら知らなかった私が、新聞編集にかかわることになり、その責任の重さに多少ビビってしまっていました。が、いやいや土曜日の会はそのような難しい集まりではないのです。「山元町震災復興」というとおおげさですが、簡単に言うた「これからの山元町での生活について、みんなが考えていく会」というのが、土曜日の会なのです。身近なことだから記事にしつつ、土曜日の会の

おいねで来て下さいん!
山元町震災復興
土曜日の会
毎週 土曜日
18:00~



今を伝える新聞にしたいと考えています。やっとな、土曜日の会新聞第1号ができました。また第2号へ向けてがんばるぞ!(内山)